



特集

私の心の風景を描こう

何気ない風景も、見る人によって特別な「情景」に変わる。教科書の「情景、気持ちを重ねて」(『美術2・3』P.16~17)は、自分の思いや感情を風景に重ねて描く、という題材だ。この題材を使った授業を取材した。

撮影 鈴木俊介



授業レポート

東京都府中市立府中第六中学校

はたけ やま まり 畠山真理先生 × 2年生

(1組・4組 各37名)

「その風景にどのような思いを重ねたいか。それがいちばん大事ですよ」と畠山先生。

風景を見たまに描くのではなく、その場所から感じたことや、自分の思い出などを重ねて、「私の心の風景」として描く—今回、畠山真理先生が、2年生で行う授業だ。生徒たちは、小学生の頃に風景を描く体験をしてきているものの、今回のような「風景画」に取り組むのは、もちろん初めて。さて、どのような作品が生まれるのだろうか。

◆第1時 描く風景を決める

「みなさん、風景の写真を持ってきましたか」。先生がそう投げかけると、生徒たちは、自分の手元にある写真をじっと見つめる。

先生は前時で、心に残る風景の写真を持ってくるよう、生徒たちに伝えていた。家族で行った海、部活の試合で行った市民グラウンド、昔住んでいた街など、それぞれに風景の写真を手に入れている。「今回の授業では、心に残る風景に、そのときの自分の気持ちを重ねて絵を描きたいと思います。まずは、グループになって、写真を見せながら、その風景に



グループで、自分の「心に残った写真」を見せ合い、どんな思いを重ねて描いてみたいか交流する。「なぜその風景を選んだの?」「どんな気持ちだった?」など、友達に質問されるなかで、自分が描きたいものが、しだいはっきりしていく。

どんな思い出があるかと、どんな気持ちを重ねて描いてみたいかを話し合ってみましょう。

生徒たちは風景への思いや、どう描いてみたいかを、グループで発表していく。

ると、四季を感じます。四季が一周すると自分も一つ歳を重ねるので、この風景に成長していく自分を重ねて描いてみたいです。」

何気ない日常の風景だが、生徒たちの思いを聞くと、急にかけがえないものに思えてくる。

いっぽうで、ただ「きれいに撮れたから」という理由で写真を選んで持ってきている生徒もいる。「この授業では、きれいに撮れているかということは、あまり重要じゃないんですよ。自分がその風景にどんな思いを抱いているかということが大事。身の回りにきつとそういう風景があるはずだから探してきてね」。先生は生徒たちに、一人一人ていねいに声をかけていく。

そして、次時では、アイデアスケッチを進めることを告げて、この日の授業は終わった。

●近所を流れる多摩川の写真を持ってきた生徒

「1年前に転校してきたんですけど、引っ越したばかりのときに、両親と多摩川の近くを散歩しました。夕暮れどきで、川面に映る夕日がキラキラ光っていて、とてもきれいでした。その風景を見て、「新しい学校でもがんばろう」と思えたんです。そのときの気持ちを込めて描きたいです。」

●自宅から見える公園の写真を持ってきた生徒

「自分の部屋から公園の木々を見

◆ 第2時
◆ アイデアスケッチをして
◆ 構想を練る

授業の冒頭では、教科書の「情景、気持ちを重ねて」(『美術 2・3年』P.16～17)に掲載されている東山魁夷の「道」や、高山辰雄の「由布の里道」などの、風景を描いた作品を鑑賞し、作家の色づかいや表現方法の工夫を感じ取った。

その後、先生は「自分の思いをあらわすために、どのような形や色、表現方法で描いたらよいでしょうか。グループで発表してみましょう」と投げかけ、青とピンクの付箋を配布した。「友達の発表を聞いて、『いい

な』と思ったことをピンクの付箋に、『もっとこうしては』というアドバイスを青色の付箋に書いてください。そして、その付箋を発表した人に渡してくださいね。

生徒たちは4人グループになり、順に発表していく。Hさん(下写真)は、祖母の家の茶畑の風景に、祖母の優しさや、一緒に茶摘みをした温かい思い出を重ねて描きたいと考えている。「おばあちゃんの優しさを表現するために、色鉛筆を使って茶畑の風景を優しい色合いで描いてみたい」と発表すると、グループの皆が「いいね」と笑顔でうなずく。しばらくで、Hさんのアイデアスケッチ

を見て「温かい思い出を重ねるなら、もっと暖色系を使ってもよいのでは」などのアドバイスも。

友達のアドバイスが書かれた付箋を受け取ったHさんは、自分のワークシートに貼って、しばし何かを考えている様子だった。そして、最初は実際の風景と同じように、緑色で茶畑のアイデアスケッチをしていたHさんだったが、友達の意見を受けて、オレンジ色や黄色などの色を重ね始めた。

他の生徒たちも、グループでの発表の後、友達の付箋も参考にしながらアイデアスケッチを描き進めていた。



上/グループで意見を交わすHさん。
左/Hさんのワークシート。
どんな思いを重ねて描きたいか文章でまとめてから、アイデアスケッチをした。
友達からもらった付箋も、ワークシートに貼る。

◆ 第3～10時
◆ 描きながら考える

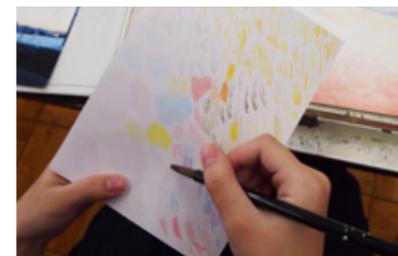
本時より、いよいよ作品の制作に入る。

アイデアスケッチを見ながら、どう描くか迷っている生徒もいれば、ためらいなくスイスイと筆を動かしている生徒もいる。

Mさん(下写真1)は、コートのある風景に、試合で勝ったり負けたりしてさまざまに入り混じった感情を重ねて描きたいと思っていた。どう表現するか考えていたところ、「いろいろな色で筆の跡を残すように描けば、自分の入り混じった感情を表



1/自分のさまざまな感情を点描画であらわしたMさん。



2/家族との思い出をどんな色で表現すればよいか、試し塗りをするKさん。



3/四季をどうあらかずか悩んだH君。背景をグラデーションにすることにした。



現できるのでは」と思い、点描画のようにあらわすことにした。自分の思いを確かめるかのように、少しずつ色を重ねていく。

また、Kさん(下写真2)は、小学生の頃に家族と雪かきをした雪景色を描こうと思っていた。「なつかしい気持ちや、家族と雪かきした温かい気持ちをあらわすには、寒色ではない色を使ったほうがよいのかもしれない。どんな色がよいだろう」と、何度も試し塗りをし、淡いピンクやオレンジ色など、自分の気持ちに合った色を探していた。

第1時で自宅から見える公園の風景を描きたいと話していたH君(下写真3)は、公園の四季の風景と自分



制作中に何度も手を止めて、描き方を考えたり、夢中になって筆を動かしたり、集中して取り組む生徒たち。

の成長を重ねて描こうと、表現方法を模索していた。考えた末に、四季の移り変わりをあらわすため、背景を緑から赤へ徐々に変化するようにし、さらに、成長する自分を力強くあらわすため、筆で叩くように色を塗っていった。

第2時ではどう風景を描くか、友達と楽しく話し合っていた生徒たちだが、いざ制作に入ると、自分と向き合い、試行錯誤を重ねながら、真剣な表情で制作に没頭している。毎回、時間いっぱいまで筆を走らせている姿が印象的だった。

そして、いよいよ最後の授業。できあがった作品を満足そうに眺める生徒たちがいた。実際の風景に、生徒たちの思いが込められた、「私の心の風景」が、そこにあった。



授業展開 生徒の活動(全10時間)

第1時:導入

これまでの思い出を振り返り、どのような風景を描くか考える。

第2時:構想を練る

アイデアスケッチをし、自分の思いを、風景にどう重ねて描くか考える。

第3～10時:制作

どのような形や色、表現方法にしたら、自分の思いをあらわせるか考えて描く。

準備するもの	生徒 教科書,筆記具,色鉛筆,ポスターカラー 教師 ケント紙ボード(B4判),ワークシート,各種画材
学習目標	●自分の内面の世界をもとに主題を生み出し,創意工夫して表現することができる。 ●作者の心情や表現の意図を考え,見方や感じ方を広げ,深めることができる。
評価規準	●心に残る風景に,自分の思いを重ねて表現することに関心をもち,主体的に取り組もうとしている。(美術への関心・意欲・態度) ●自分の思い出や体験をもとに発想し,形や色,表現方法の効果などを考えながら構想を練っている。(発想や構想の能力) ●材料等の特性を生かし,自分の意図に応じた表現ができています。(創造的な技能) ●風景を描いた作品を鑑賞し,作者の心情や表現の意図について,見方や感じ方を深めている。(鑑賞の能力)

風景に思いを重ねて

生徒たちの表現のプロセスをご紹介します。

特集
「私の心の風景」を描こう

実際の風景

アイデアスケッチをする

形や色、描き方を工夫して表現する

完成!



K君



親友と遊んだ近所の公園

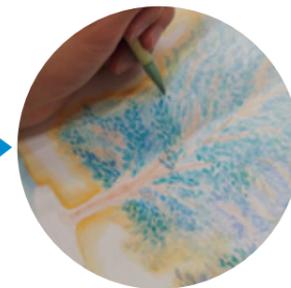
小学生の頃に、親友とここでよく遊んだ。中学校に入ってからは、親友と疎遠になってしまったので、ここを通るたび、少しせつない気持ちになる。



悩みながらアイデアスケッチを重ねる。自分と親友を象徴するように、2本の木を描くことにした。



昔、親友と遊んだときの、温かい気持ちをあらわすため、木の周りをオレンジ色で塗る。



今のせつない気持ちを強調するため、木の葉は青系の色に。立体感を出すため、濃淡をつけながら描く。



自分と親友をあらわす2本の木を包み込むように、画面の両端に木の枝を描いた。



Hさん



昔、家族旅行で見た風景

最近友達と過ごす時間を優先し、家族との仲があまりよくない。でも、昔、家族で楽しく旅行したときの風景の写真を見て、あのときのように、家族と仲よくしたいと思った。



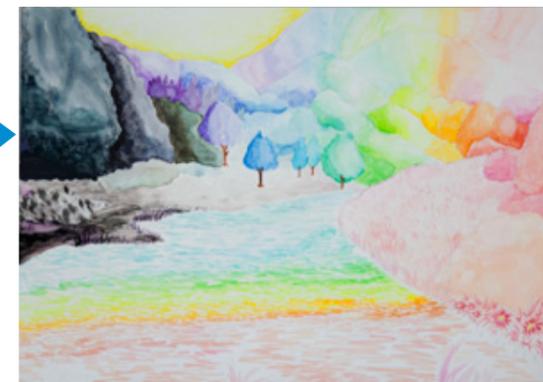
最初は実際の風景に近い色でスケッチをしたが、今の自分の複雑な思いをあらわすため、さまざまな色を使うことに。



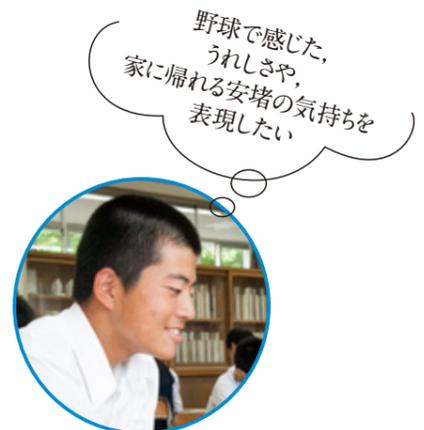
少しずつ色を混ぜて、自分の気持ちに合う色を探す。緑色だけで何種類もつくった。



繊細な今の気持ちをあらわすため、薄い色を重ねていく。家族と仲よくしたいという思いは、暖色系の色を使って表現。



明るい気持ちだけでなく、陰りのある気持ちもあらわすため、左側に暗めの色を配した。



N君



毎日使う自転車置き場

自転車通学のため、ここから一日が始まり、ここで一日が終わる。この場所を見ると、野球の試合で勝ったときの喜びや、練習の後の「もうすぐ家に帰れる」という安堵の気持ちを思い出す。



アイデアスケッチでは、野球で勝ったときのうれしさや、この場所を感じる安堵感を、オレンジ色の野球ボールの形で表現した。



友達から「このオレンジ色の水玉は何?」と質問が殺到。他の表現方法がよいかも……と思い始める。

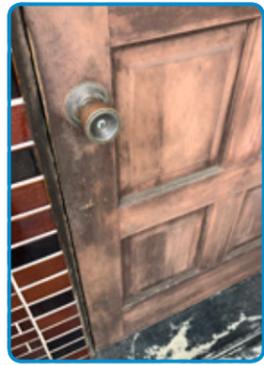


自分の気持ちを、野球ボールの形であらわすのではなく、全体をオレンジ色のグラデーションで描こうと決める。



画面全体を、オレンジ色の濃淡で構成。奥行きを出すため、手前を濃く塗るよう心がけた。

私の心の風景



Iさん

自宅の玄関

家族とケンカして家を飛び出してしまったときの、迷いの気持ちを描きました。家族の優しさを、扉の隙間からあふれる光として表現し、家族とのさまざまな思い出を玄関のタイルの色で表現しました。



I君

山の中で見た滝



家族で山の中をへとへとになりながら歩いていたとき、急に視界が開け、滝が見えました。そのときの感動や、滝のキラキラとした光を、点描であらわしました。



Hさん

祖母の茶畑



幼い頃、祖母と茶摘みをした思い出を表現しました。昔はお茶のおいしさがわからなかったけど、祖母と摘んだお茶は、甘くておいしく感じられました。その温かい思い出を、オレンジ色で表現しました。

授業を終えて 主題を生み出すために

「心に残る風景」を思い浮かべるとき、人は風景だけではなく、身近な人とのやりとりや、そのときの匂い、音など、五感を使って感じた記憶や感動と一緒に思い浮かんでくるのではないのでしょうか。

本題材は、ただ風景画を描くのではなく、生徒が風景から感じた思いを重ねてあらわすという試みでした。指導にあたって気をつけたのは、次の2点です。

まず、風景を選ぶ際、「きれい」などの理由ではなく、思い入れがあり、記憶や感動がよみがえってくるかどうかで決めること。生活の中で自分との関わりが強いモチーフのほうが主題を発想しやすいからです。

次に、思いをあらわすためにどんな形や色、表現方法を使えばよいかを〔共通事項〕の視点に基づいて考えさせること。ワークシートに言葉で書かせることでそれを認識させ、グループで話し合うことで、主題に最もふさわしい表現方法がぶれないように気をつけました。

思いを作品に込めることで、より深い表現に近づけたのではないかと思います。これからも、生徒が自ら主題を生み出すことのできる授業を実践していきたいです。

畠山真理 はたけやま・まり

宮城県生まれ。多摩美術大学大学院修了後、東京都の公立中学校教諭に。2015年より現職。11年に東京都研修センターが実施する「東京教師道場」を修了。12年に東京都教育研究員。



畠山先生の指導者である中村一哉先生に、今回の授業リポートをお読みいただきました。

授業リポートを読んで

自分と向き合う 美術の授業

畠山先生の授業は、何を描くか、どのように描くかを、生徒自身が見つけていく過程がとていねいに計画された実践です。

作品に描かれたものが風景であっても、そこに表現されているのは生徒一人一人の思いです。本題材のねらいは、風景を見て発見したことや感じたことを描くのではなく、過去の自分の経験を思い返し、そのときの印象や気持ちなどを想像しながら、それを形や色彩、構図などを工夫しながら表現することです。したがって、風景自体は生徒にとって身近で扱いやすい写真を活用し、そこに自分の思いをどのように反映させて表現するかが、本題材の学びの中心となります。

その課題に迫る手立てとして、授業で大事にされているのが「対話的な学び」です。

まず、授業の導入で、写真を選択した理由を説明する話し合いが設定されています。その意図は、風景に込めた思いを語ることで一人一人が表現の意図を確かめ、他者の異なる視点を受け止めながらそれを深めて、自分の主題を明確にしていくことです。さらに、アイデアスケッチの段階でも、相互鑑賞に基づく話し合いが行われます。ここでは付箋を用いて、スケッチに対する具体的な話し

合いや助言が、形や色彩、構成や構図などの造形的な視点に基づいて行われています。つまり、他者の視点を参考にして自分の表現方法を見つめ直し、どのようにあらわすかを考えて、構想を膨らませていく過程といえるでしょう。本授業では、ワークシートやアイデアスケッチを通して自らの思いを具体化していく過程が、明確なねらいに基づく対話による協働的な学びによって深められ、一人一人が納得できる豊かな表現を発見していく展開をつくり出しています。

また、話し合いや制作の過程で、造形的な視点が十分に働くように留意していることも見逃せません。第2時の冒頭に位置づけられた作家の風景画の鑑賞では、色彩や構図などへの気づきが意図されています。いわゆる〔共通事項〕の視点に基づいた鑑賞活動が行われ、それが、生徒自身の表現に生かされることで実感的な理解に結びついていることが感じ取れます。鑑賞の学習経験が、表現の発想や構想を練る場面で活用、応用されることで一層深まり、それがさらなる美術との触れ合いの豊かさにつながる。そこに表現と鑑賞の相互の関連を図ることの意義があるように思います。

そのような美術の学びを、生徒自身が自分と向き合う貴重な体験として自覚できていること。それが畠山先生の授業の魅力です。



特集
「私の心の風景」を描こう



中村一哉 なかむら・かずや

東京都生まれ。実践女子大学講師。多摩美術大学卒業後、東京都の公立中学校教諭、東京都の教育行政職を経て、府中市立府中第五中学校長を務める。中央教育審議会「芸術ワーキンググループ」委員。学習指導要領(平成29年告示)作成協力者。